田山花袋「蒲団」試論

― 語りの構造を手がかりに ―

王　梅

はじめに

明治四十年九月一日に、田山花袋は『新小説』に「蒲団」を発表した。その一ヶ月後の十月一日に、『早稲田文学』と『明星』の評論陣は一斉に論を出し、「蒲団」の心理描写をクローズアップした。[1] 中でも、片上天弦は「形の上に客観的描写式で、作者の態度は主人公の主観的説話式である」と語り手と主人公の癒着を指摘し、「作者がこの題材に対して客観的態度に出でなかつたことは作者のために惜しまねばならぬ」と不満の意を漏らした。この問題提起は、当時の文壇の重鎮島村抱月の「此の一篇は肉の人、赤裸々の人間の大胆なる懺悔録である」という評言に集約される。抱月の評価に導かれ、昭和二十年代から、中村光夫、平野謙、岩永胖[2]などが、「蒲団」は作者田山花袋の告白であるという前提条件を認めた上で、小説が扱う材料が事実か虚構かをめぐって、作品分析から逸脱した論争を続けた。

昭和六十年代に入って、棚田輝嘉氏[3]は、テクストの四章から八章までを中心に、芳子の肉体関係に関わる語りに考察を加え、「若い二人の男女の肉体関係という〝事実＝犯罪〟を語るために創造された虚構の物語なのだ」という新しい見解を出した。藤森清氏[4]は棚田氏の論に基づき、芳子の肉体関係という事件の語りに関して「テキストの統辞に相反する二つの傾向がある」と、さらに研究を深めた。つまり「一連の出来事、行為を一つの筋に構成しようとする統辞的な機能」と、それに「拮抗」する「消極的な統辞機能」が存在すると指摘する。

百年近くの研究史は、時雄の心理を書くか、「堕落女学生」事件を書くかという分岐点をめぐって、展開してきた。このことは、心理描写と事件の語りがテキストを構築する二大要素だということを示す。本論では、明治四十年における花袋が人間の心理を描写する技法への認識を考慮に入れ、「蒲団」の心理描写を読み直す。その上で、内と外を揺らぐ語り手の視点によって、主人公の時雄像がいかに描写されるかを明らかにしたい。時雄の心理を貫く、抑圧される欲望を分析した後、第四章から第八章まで、芳子の肉体関係の露顕がいかに語られるかを考察する。最後に、露呈する「肉体関係」という事実がいかに読者に響いて、作中人物への読み直しを促すかを明らかにしたい。

一　内と外を揺らぐ視点

小説の主人公竹中時雄は妻子を持つ中年の男である。夫婦の愛に倦怠感を抱く彼は三年前から「寂しい人」になった。その時文学少女の芳子が現れ、時雄は彼女の新鮮さに心を惹かれる。芳子に恋人ができたのを知った時雄は内心が複雑になり、「妬みと惜しみと悔恨との念が一緒になって」、「師としての道義の念もこれに交つて、益々炎を熾んにした」。四ヵ月後、芳子と恋人との「肉体関係」が曝け出され、芳子は父親に故郷に連れ戻されて、「さびしい生活、荒涼たる生活は再び時雄の家に音信れた」。

これまでの小説と比べた「蒲団」の最大の特色は「醜なる心を書いて事を書かなかつた」[5]ことにある。つまり、時雄自身の行動でもなく、社会との葛藤でもなく、時雄の醜い内面を読者に赤裸々に見せることである。

「蒲団」における心理描写は、時雄を主語とする「〜と思った」、「〜と考えた」、「〜と感じた」のような普通の方法以外に、以下の技法も使われる。

ア、語り手が時雄の感受性や認識を通して、外部のものを叙述する方法。

一見時雄の動作を描写するように見えるが、時雄の五感が混じるため、三人称の「渠」小説でありながら、常に一人称「私」小説として読まれてきたのである。

毎日機械のやうに同じ道を通つて、同じ大きい門を入つて、輪転機関の屋を撼す音と職工の臭い汗との交つた細い間を通つて、事務室の人々に軽く挨拶して、こつ〳〵と長い狭い階梯を登つて、さて其の室に入るのだが、東と南に明いた此の室は、午後の烈しい日影を受けて、実に堪へ難く暑い。それに小僧が無精で掃除をせぬので、卓の上には白い埃がざら〳〵と心地悪い。（傍線は引用者による。以下同）（一）

この一段は語り手は主人公に癒着し、「渠」の感覚でまわりの環境を捉える。形容詞「臭い」、「堪え難く暑い」、「心地悪い」は主観的な嫌悪を漂わせ、「渠」の不満を読者も共有するという効果が出る。

イ、「時雄の胸は嵐のように乱れた」、「時雄の胸は燃えた」などのような表現を使って、時雄の心理を提示する方法。

この場合時雄の心理活動が長々と描写される。そして、心理の主体が主語として提示されることはないため、読者は、語り手を媒介せずに自ら時雄の内側にすっぽり入り込んだような印象を持つことになる。時には、語り手の提示さえもなくなり、時雄の内面が直接に読者の前に開示される。

悲しい、実に痛切に悲しい。此の悲哀は華やかな青春の悲哀でもなく、単に男女の恋の上の悲哀でもなく、人生の最奥に秘んで居るある大きな悲哀だ。行く水の流れ、咲く花の凋落、此の自然の底に蟠れる抵抗すべからざる力に触れては、人間ほど儚い情けないものはない。

汪然として涙は時雄の鬚面を伝つた。（四）

この一段は、片上天弦の「作者の態度は主人公の主観的説話式である」という評言が指すところだろう。川上美那氏[5]も、「主人公竹中の独白に語り手が主情的に重なり（略）竹中の内面世界を感傷的に肯定することにとどまった」と述べ、時雄の声＝語り手のものだと主張する。しかし、よく見分けると、最後の外面描写以外の部分は、語り手から独立する時雄自らの独白ではないだろうか。この点で、鈴木登美[7]氏の意見は参考になるだろう。氏の意見によると、時雄の心理が「自由間接話法[8]」で語られるため、時雄の悲哀が彼自身の声を通して直接に表明されているような印象を読者に与える。つまり、語り手が完全に透明になり、時雄の悲哀が最大限に流露できるのが特徴である。語り手の痕跡が消えたため、三人称の語りがここで一人称の語りに変わったような感じを読者に与える。このように、語り手が時雄に癒着する、あるいは隠退することで、時雄の内面が赤裸々に、漏らすことなく、読者側に見せられることになった。

「蒲団」に現れる心理描写への多様な試みは、当時花袋が考えていた「大自然の主観」をいかに作品に持ち込むかという意識と深く関わっていると私は考える。「大自然の主観」は新文学のガイドラインとして、正宗白鳥と「野の花」の序文（明治三十四年）をめぐっての論争で打ち立てられた。花袋は小説における作者の主観を、「小主観」と「大自然の主観」とに二分する。前者は「作者の小主張、小感情、小理想、所謂自然の面影を比較的に有して居らぬ、偏狭な、まことの意味の乏しいもの」であり、後者は「この自然が自然に天地に発展せられて居る形を指す」ものである。この文脈からわかるように、「大自然の主観」は、狭い個人的な「小主観」に束縛しない作者の観察で、再現される作中人物の心理だと言えよう。これにより、花袋は意識的にセンチメンタリズムから脱し、自然主義に入ろうとする。

根岸泰子[9]氏はこの点に関して、花袋の「大自然の主観」がかれのリアリズム観を示し、すなわち「読者に対し語りかけるという顕在的な語りを消し去り、一定の観察的立場を足場に素材を対象化・客観化して叙述する」ことだと指摘する。つまり、花袋は、顕在的な語りを作者の「小主観」の表れとして、避けようとしている。その代わりに、作中人物が持つ千変万化の心理活動を人物の内側から捉えようとしている。

「蒲団」発表二年後、平面描写という段階に到達した花袋は「描写と説明」（『文章世界』、明治四十二年九月）[10]で、語り手による作中人物の心理描写の問題を次のように述べる。

> 何うか説明でなしに、描写で総ての感じを顕はしたいと思ふ。
>
> （略）
>
> かれはかう思つて居るとかあゝ思つてゐるとかいふ風にかきたくない。作者が作中の人物を人形つかひが人形をつかふやうにつかつて動かして居るのを見ると、興味が索然として了ふ。作者は説明しても好いが、少くとも其説明は作者の説明であつてはならない。

「かれはかう思つてゐる」という表現が花袋に、「作者の説明」として否定される理由は、文中の人形つかいと人形という比喩によって説明される。人形つかいは人形に対して、自由に支配できるような優

位にある。それと同じように、「作者の説明」は、語り手が作中人物を操縦する行為になるため、読者は「興味が索然として了ふ」。ここで、根岸氏[11]の言葉を借りれば、「「描写」における語り手は、作中人物の上方から批評するのでなく、その内側にいて彼自身を演じる機能といえよう」ということである。「平面描写」のあたりからは、花袋は「描写」という文体の問題を取り上げたが、「蒲団」の中には、すでに新しい文体を試みる意欲が示されている。

前述した技法イは、「説明」による心理描写より、「描写」による心理描写になるはずである。語り手の顕在性が「小主観」につながるため、作者は語り手の媒介性を最大限に低めることを前提に、時雄の心理を再現しようとする。そのため、時雄の心理を、彼が読者の前で独白するように、深く、詳しく、いきいきと描写することができる。

同時代評をもう一度見ると、技法アが示すように、語り手が時雄の感覚で外部の事物を捉える場面は確かに存在する。しかし、「作者の態度は主人公の主観的説話式である」という片上天弦の批評は、技法イの特徴に気づいておらず、主人公の独白を語り手のものと混同しているため、妥当ではないと考える。

以上、語り手がいかに時雄の内面を視点にしたかを論じてきた。では、語り手の視点はずっと時雄の内面に固定され、変わらないだろうか。

技法イに挙げられる引用文の最後の一句、「汪然として涙は時雄の髭面を伝つた」はもう一つの視点を提示してくれる。それは外から主人公を観察する視点である。鈴木登美氏[12]は、最後の文の「汪然として」という厳しい副詞が、俗語的な「髭面」と、俳諧を思わせる仕方で不意に結び付けられ、時雄の感傷的な自己憐憫が、アイロニカルに相対化されると指摘する。時雄はみずから芳子が奪われた悲しみを「人生の最奥に秘んで居る」、「大きな」ものへと昇華しているが、かれの目が届かない「汪然として涙は」、「髭面を伝つた」という外部の表情を語り手によって読者に伝えるというのである。

このように、語り手の視点は時雄の内と外を自由に揺れ動き、彼の内面を彼の声で再現する一方で、彼の外面を客観的に捉えようとする。

時雄の世間に対する体面が、かれの煩悶を家族などに打明けることを許さないため、時雄の「醜なる心」（島村抱月）に伴う外部の身体もいつも特異性を呈する。順に挙げてみよう。時雄は、芳子に恋人が出来たのを知った直後に、酒で苦悶を紛らした結果、「泥の如く酔った」。その後「厠の中に横に」なって、「赤土のやうな顔に大きい鋭い目を明いて、戸外に降り頻きる雨をぢつと見て居た」。芳子の手紙を受け取って、時雄は境内の中で、「耐へ難い自然の力の圧迫に圧せられたものゝやうに、再び傍のロハ台に長い身を横へた」。そしてテキストの結末、芳子が去った二階の部屋で、「時雄は其の蒲団を敷き、夜着をかけ、冷たい汚れた天鵞絨の襟に顔を埋めて泣いた」。これら「横たわる身体」[13]は、「道徳の力」に抵抗する「自然の力」が時雄に施す抑圧として、常識・理性を失うまで、かれを狂わせ、特異性を与えるのである。

基本的に主人公の内と外に視点を定めている語り手は、場合によって他の作中人物の内面にも視点を配している。次の引用は、田中との性関係が露顕し、帰郷する運命になった芳子を時雄が駅まで見送りに行く場面である。

時雄の後に、一群の見送人が居た。其の蔭に、柱の傍に、いつ来たか、一箇の古い中折帽を冠つた男が立つて居た。芳子は此を認めて胸を轟かした。父親は不快な感を抱いた。けれど、空想に耽つて立尽した時雄は、其の後に其の男が居るのを夢にも知らなかつた。（十）

「古い中折帽を冠った男」は恋人の田中である。この一段はまず、芳子に内的焦点化をして、「胸を轟かした」という内面を語る。続いて、芳子の父親の内面に入り、「不快な感を抱いた」と描いている。最後に、芳子と自分が結ばれる可能性を考え込んでいる時雄の内面を、「空想に耽つて立尽した時雄は、其の後に男が居るのを夢にも知らなかつた」と語り、空想に耽っている時雄を相対的に捉え、その哀れな姿を読者に示す。

このように、語り手は時には時雄の内心に入り込み、時には時雄の傍で観察する。内と外、自由に揺れ動く語り手の視点は、単調無味な夫婦の生活から脱しきれない、愛する女弟子と正々堂々と結びつかない中年男の像を写実的に再現することができたのである。

二　時雄の抑圧される欲望

前節まで、語り手が時雄という人物を描写する方法を論じた。この節では、時雄の心理を貫くもっとも中心的なものを見てみよう。

「蒲団」のプロットの構成から見ると、第一章では時雄が「今回の事件」（つまり芳子の恋愛事件）を知って二、三日後の時点が語られ、第二、三章は錯時法で、「三年前」に遡って、「今回の事件」までの出来事が紹介される。第四章は時間的に第一章に続き、「今回の事件」以後の出来事を物語の時間の流れに沿って語ってくる。まず、「今回の事件」に至るまでの時雄の心理を検討してみよう。

芳子が現れる前の時雄の心理は、「新婚の快楽などはとうに覚め尽した」、「単調なる生活につく〴〵倦き果てゝ了つた」状態である。「出来るならば新しい恋を為たいと痛切に思つた」時雄は、新たな恋愛で生の寂寥から脱出しようとする。この時、芳子が現れ、かれの孤独な生活を破った。時雄は密かに師弟関係の上に「男女関係」[14]という妄想を加える。そして「機会」があれば、「道義の力、習俗の力」を破るのは「帛を裂くよりも容易だ」と考える。

次に、このような「機会」が詳しく語られる。一度は芳子が厚い手紙を寄せて、その手紙には「自分の不束なこと、先生の高恩に報ゆることが出来ぬから自分は故郷に帰つて農夫の妻になつて田舎に埋れて了はうといふことを涙交りに」書いている。時雄は「其の手紙の意味を明かに了解し」て、「返事をいかに書くべきかに就いて一夜眠らずに懊悩した」。時雄にとって、芳子の手紙に自分を「懊悩」させるほど深い意味が含まれることが窺える。その意味について、芳子に恋人ができたのを知った時雄が芳子の心理を推測するとき、「あの熱烈なる一封の手簡、陰に陽に其の胸の悶を訴へて、丁度自然の力が此の身を圧迫するかのやうに」というように捉える。つまり、時雄は芳子の手紙に芳子の性的欲望を読んでいる。時雄は「穏かに眠れる妻の顔そ

れを幾度か窺つて自己の良心のいかに麻痺するかを自から責めて」、「そしてあくる朝贈つた手紙は、厳乎たる師としての態度であつた」。二度目の「機会」は、芳子が一人で留守番をしているところへ時雄が訪問したことである。「女の表情の眼は輝き、言葉は艶めき」、「其の白い顔には確かにある深い神秘が籠められてあつた」などの表現も芳子の欲望を指示するが、時雄は「すぐ帰った」。

密かに芳子を恋人と見なす時雄が「道徳の力」を破る「機会」を自ら見逃した。この行動は、「機会」があれば、「道義の力、習俗の力」を破るのは「帛を裂くよりも容易だ」という事前の自己規定を修正することになる。時雄は「良心のいかに麻痺せるかを自ら責め」ることで、世間における自分の体面を守ることになるが、人間としての内的な欲望を抑えることにもなった。この二度の「機会」の記述は、時雄が空想の世界にのみ芳子との恋を成り立たせることを浮き彫りにした。この態度を支える時雄の理論は「自分の青年の経験に照らして見ても、神聖なる霊の恋は成立つても肉の恋は決してさう容易に実行されるものではない」という認識である。若い時（未婚）の時雄が、肉体的欲望（「肉の恋」）を伴わない精神的恋愛（「霊の恋」）、すなわちプラトニック・ラブを信奉していたことが窺える。

自然主義以前の花袋は、多くの「少女小説」を創作した。明治二十九年の「わすれ水」は二十年代の小説の代表作と言ってもいい。田舎の中学校に赴任した青年教師鐘一は財産家の娘に恋をする。鐘一は「出来るならば少女をまもる親といふもの無くてあれ。この世の中に道徳といふもの無くてあれ。さすればわれは直にその傍に行きて、手を握りて、接吻して、この燃ゆるが如き心を残る所なく打明くることを得べきものを」と思い、恋の告白を躊躇う。岸規子氏[15]は鐘一の心理における「錯誤」に目を向けて、彼の恋の狂熱を妨げるのは、プラトニック・ラブに拘る詩人としての矜持だと指摘している。

鐘一が娘への欲望を自ら禁じたのと同様の抑圧意識は、「蒲団」の時雄にも見られる。芳子の恋愛事件が発生するまでは、時雄は芳子の誘惑を断るほど、自分の欲望を抑圧し、「厳乎たる師」としての態度を取ったのである。それでは、恋愛事件が発生した後の時雄の内面はどうだろう。

芳子の恋愛事件が時雄の心理に与えた影響は、二つの段階で捉えることができる。最初の段階は芳子が恋人を得たのを知った直後から、二三日後勤め先から帰宅するまでの時間帯に現れる心理であるが、テクストでは第三章の後半部分と第一章がそれに該当する。「妬みと惜しみと悔恨との念が一緒になつて旋風のやうに頭脳の中を回転した」。「妬み」は、芳子を奪った恋人に発する感情であるが、「惜しみ」と「悔恨」は、欲望を抑圧した過去の自分を責めることである。さらに「その身の意気地なしと運命のつたないことがひしひしと胸に迫った」と欲望を抑圧する行為を自分の運命にも結びつけている。

二つめの段階は勤め先から帰宅し、芳子からの手紙を受け取ってから、四ヵ月後時雄の働きで二人の肉体関係が露顕したまでの心理であるが、テクストでは第四章から第八章まで語られる。

この一通の手紙を読んで居る中、さまざまの感情が時雄の胸を火のやうに燃えて通つた。其の田中といふ二十一の青年が現に此の東京に来て居る。芳子が迎えに行った。何をしたか解ら

ん。此の間言つたことも丸でうそかも知れぬ。此の夏期の休暇に須磨で落合つた時から出来て居て、京都での行為もその望を満す為め、今度も恋しさに堪へ兼ねて女の後を追つて上京したのかも知れん。手を握つたらう。胸と胸とが相触れたらう。人が見て居ぬ旅籠屋の二階、何を為て居るか解らぬ。汚れる汚れぬのも刹那の間だ。かう思ふと時雄は堪らなくなつた。（四）

これは芳子から、上京した田中（恋人）と一日見物することを師に報告する手紙を読んでいる時雄の心理である。この手紙を受け取る直前に「二人の間の関係は一段落を告げた。これからは、師としての責任を尽して、わが愛する女の幸福の為めを謀るばかりだ」と思ったにもかかわらず、手紙を読んでいる時、「さまざまの感情」が「火のように燃え」る。芳子の肉体関係に非常に拘る心理が前節で述べたイの技法で、時雄の独白のように読者に伝わってくる。前の段階では表出されることのなかった芳子と田中の肉体関係を疑う気持ちが、この段階から初め読者の前に現れるのである。

余り其の文通の頻繁なのに時雄は芳子の不在を窺つて、監督といふ口実の下に其の良心を抑へて、こつそり机の抽出やら文箱やらをさがした。捜し出した二三通の男の手簡を走り読みに読んだ。恋人のするやうな甘つたるい言葉は到る処に満ちて居た。けれど時雄はそれ以上にある秘密を捜し出さうと苦心した。接吻の痕、性欲の痕が何処に顕はれて居りはせぬか。（五）

芳子の恋愛事件が起こる前に、芳子の手紙に芳子の欲望を読み取った時雄は「自己の良心のいかに麻痺するかを自ら責め」たが、ここでは「監督という口実の下にその良心を抑えて」、芳子の手紙を盗み見る。「接吻の痕、性欲の痕が何処に顕われておりはせぬか」は、芳子と恋人の肉体関係を知ろうとする時雄の嫉妬の告白である。

それでは、なぜ時雄はこんなに芳子の肉体関係に拘るのだろうか。生方智子氏[16]は、芳子の恋愛事件に対し、この時雄の行動は「抑圧パラダイム」という認識枠によるものだと指摘する。氏の説明によると、時雄の「抑圧パラダイム」には以下のような意味がある。まず、「霊の恋」と「肉の恋」という二つの側面で芳子の恋愛を見ること。前者は許容される事柄であるが、後者は許されないものである。その上で、芳子の「霊の恋」とは、内面の問題によって証明されるのではなく、「肉の恋」を否定する形でしか証明されないのである。つまり、時雄は芳子の心の存在を、芳子の性の抑圧を通じてのみ知ることができる。

この「抑圧パラダイム」は前述した時雄が二度の「機会」を見逃した抑圧意識と同質のものではないだろうか。時雄は若いころも、中年の現在も、自分の恋に対しても、他人の恋に対しても、「肉の恋」をタブー視、一刻も「肉」の抑圧を解きさえもしなかった。柄谷行人氏[17]が指摘するように、自然主義者があばきたてたような肉体は、すでに「肉体の抑圧」の下にあるのである。

三　肉体関係に関する語り

前節では時雄の抑圧意識を検討して、芳子の恋愛事件に対する時雄の心理が二つの段階に分かれることを論じた。時雄の若い二人の肉体関係を懐疑するまなざしは、恋愛事件が発生してすぐに現れるわけではなく、二つの段階に一貫し、事実の解明までを指している。結論から遡って見ると、時雄の疑い＝事実の真相という設定は読者に少なからぬ意外さをあたえるだろう。「二人は決して罪を犯しては居らぬが」という芳子の言葉が虚言であることも、事実の解明に従って、「私は先生の御厚意を利用して、先生を欺きました」という芳子の告白の手紙によって、明らかになる。

したがって、四章から八章までの部分に対し、棚田氏[18]は推理小説のような読み方を提示する。つまり、肉体関係という「事実＝犯罪」がいかに解明されるのかという読み方である。しかし、「蒲団」というテクストの特殊さは、事実の真相が時雄の探求という行為ではなく、「ふと」したきっかけで明らかになることにある。時雄の心に「若い二人の男女の肉体関係」への懐疑が生じるのは、芳子の言葉や行為に破綻を見つけたためではなく、彼自身の抑圧意識によるものなのである。この点で、藤森氏[19]の意見が参考になるだろう。氏は、肉体関係の露顕を叙述する三人称の語りを、「積極的な統辞機能」と見る。一方で、一人称独白体による時雄の心理描写が「肉体関係という事実の露呈を遅らせる」ため、「消極的な統辞機能」が現れ、「積極的な統辞機能」と「拮抗」するとしている。ところが、時雄の暗い心理の一部分となる嫉妬心が芳子の肉体関係の露呈につながるため、お互いに絡み合う二つの「統辞機能」は果たして、「拮抗」の一言でカバーできるのだろうか。

本節では、時雄への心理描写が行われるのと同時に、肉体関係が露呈することがいかに語られているのかを考察する。その上で、事実の真相がわかる時点に置かれる読者が、いかに主人公への再認識を迫られるかを分析してみたい。

ここまで述べてきたように、芳子の恋愛事件はすぐに時雄の疑いを引き起こすわけではない。初めて、時雄が二人の肉体関係に疑いのまなざしを投じるのは芳子からの手紙を受け取った時である。「此の間言つたことも丸でうそかも知れぬ。此の夏期の休暇に須磨で落合つた時から出来て居て、京都での行為もその望を満す為め、今度も恋しさに堪へ兼ねて女の後を追つて上京したのかも知れん」（四）。芳子の肉体関係に拘る時雄のこの独白は、抑圧される男の欲望を読者に伝える。それと同時に、事実の真相を暗示する伏線にもなる。

注意すべきなのは、この嫉妬心による懐疑は、恋人同士の親しみが、時雄に感知されるたびにだけ、時雄の心理から読者に伝わるということである。順を追って、それを挙げてみよう。芳子の手紙を読んだ後、芳子を連れ戻すために、時雄は義姉の家に行く。芳子がまだ帰ってこないのに気づいた時雄は、「此の夜、此の暗い夜に恋しい男と二人！」、「神聖なる恋とは何事？」「汚れたる行為のないのを弁明するとは何事？」と「胸はまた燃えた」。田中が京都に戻った後、二人の文通が頻繁になったため、時雄は「監督といふ口実の下に其の良心を抑へて」、「接吻の跡、性欲の痕が何処かに顕はれて居りはせぬか」という「秘密」を探し出そうと、芳子の手紙をこっそりと読む。その後、田中が同志社を辞めて、文学で身を立てようと東京に住んでから、芳子が「学

校に行くと称して恋人の許に寄りはせぬか」と思うと、時雄の「胸は疑惑と嫉妬とに燃えた」。真相解明直前の懐疑は、時雄の監督を離れて、二人で一緒に暮らしたいという決心が報告される芳子の手紙を受けた時である。時雄は二人で一緒に暮らすという言葉に「警戒すべき分子の多いの」を思い、「既に一歩を進めて居るかも知れぬ」と思った。

このように、二人の肉体関係への疑いは時雄の抑圧される欲望が満ちる心理を通して、繰り返し読者に伝わる。しかし、読者はそれを時雄の嫉妬心の発作による不正な貶しだと思い込み、信用しない。

読者にそう判断させるもう一つの理由は芳子への語りによる。恋愛事件が起きてから、初めて芳子の内面[20]が見られるのは芳子が時雄の家に連れ戻される時である。時雄の満足、妻の安心に続き、芳子にも内的焦点化がなされる。

芳子は恋人に別れるのが辛かつた。成らうことなら一緒に東京に居て、時々顔をも見、言葉をも交へたかつた。けれど今の際それは出来難しいことゝ知つて居た。二年、三年、男が同志社を卒業する迄は、たまさかの雁の音信をたよりに、一心不乱に勉強しなければならぬと思つた。(五)

肉体関係の有無に関する情報を正確に把握するのに一番有効な手段は、本人から聞き取ること、つまり芳子の心理描写を行うことである。しかし、読者に見せられる芳子の内心は、「恋人に別れるのが辛かった」、「一心不乱に勉強しなければならぬ」ことであり、師を騙すなどの個人的計算が示されることはない。芳子自身も肉体関係を問題にしていないため、読者に二人の肉体関係は事実ではないという錯覚を与えやすい。

この点に関して、滝藤満義氏[21]は「三人称小説の語り手であるならば、竹中には計り知れない芳子の胸の内をも十全に読者に知らせてこそ、その甲斐はある」と指摘している。つまり、「蒲団」の「肉体関係」言説は、きわめて中途半端な三人称の語りとなっている。語り手は芳子の胸のうちをすべて開示するのではなく、彼女の心理のうち開示する情報を選択して、「肉体関係という事実の露呈を遅らせる」(藤森清氏)ために、読者に不完全な情報を提供しているのである。

第八章になると、事実の真相が解明される。芳子と田中の恋がエスカレートするため、芳子の父親が問題を解決に上京してくる。「ふと二人の関係に就いての疑惑が起つた」時雄は、「関係があると思はんけりやなりますまい」という父親の言葉によって促され、芳子に潔白の証明を強い、「肉体関係」の秘密を抉り出させた。

結局、自己を抑圧した時雄の暗い内面による懐疑が実は事実であるったわけだが、この設定は読者に幾分かの意外感を及ぼす。そして、一旦事実の真相が明らかになってしまうと、芳子という人物への読み直しを読者に課するのである。

小説の第三章に戻ろう。芳子の恋愛事件が起こる前に、以下のような記述がみられる。

四月に入つてから、芳子は多病で蒼白い顔をして神経過敏に陥つて居た。シユウソカリを余程多量に服しても何うも眠られぬと

て困つて居た。絶えざる欲望と生殖の力とは年頃の女を誘ふのに躊躇しない。芳子は多く薬に親しんで居た。

四月末に帰国、九月に上京、そして今回の事件が起った。(三)

「四月末に帰国、九月に上京、そして今回の事件が起った」という普通の記述をいま読み直すと、深い意味を帯びているように感じられる。それは一種の因果関係として、四月の「神経過敏」と九月の京都旅行が結び付けられることである。つまり、「絶えざる欲望と生殖の力」は芳子を圧迫して、とうとう田中と性行動に踏み切らせたのである。

「肉体関係」が露顕した後の芳子の告白によると、「私は田中に相談しまして、何んなことがあつても此の事ばかりは人に打明けまい。過ぎたことは為方が無いが、これからは清浄な恋を続けようと約束したのです」。人間の本能としての性的欲望は、人間の理智がコントロールできないほど巨大で、強烈であることが示される。芳子が肉体関係を否定する言葉には、欲望が満たされるのを自分の過ちとして、隠そうとする狙いがある。それは「新しい女」という認識を持つ芳子の欠陥である。「聖書にも女は親に離れて夫に従ふと御座います通り、私は田中に従はうと存じます」、「私は恋を父母の都合によつて致すやうな旧式の女でないことは先生もお許しくださるでせう」と言った芳子の声からは、恋を両親より自分の意志で決める覚悟が聞こえる。生方氏[22]は「性的関係は個人の主体的な自己決定において結ばれるもの」という意味で、大正時代の平塚らいてうの宣言につながると指摘する。しかし、「秘密」が師に見抜かれたら、芳子は「私は堕落女学生です」と自らを貶す。その後「親を捨てゝまでも、帰国を拒むほどの決心が附いて居らなかつた」芳子は、自分の運命を師と父親に任せて、田舎に連れ帰された。

一方で、女弟子芳子の行為に対象化されるのは、欲望を自ら抑圧する師の時雄である。時雄は「神聖なる霊の恋は成立つても肉の恋は決してさう容易に実行されるものではない」と信じ込み、簡単に芳子に騙される。ところが、嫉妬心が懐疑心を催し、偶然に事実の真相を解明した。肉体関係が暴露された後、時雄の目に映る芳子像はイメージダウンした。「今迄上天の境に置いた美しい芳子は、売女か何ぞのやうに思はれて、其の体は愚か、美しい態度も表情も卑しむ気になつた」。つまり、「美しい」ことと「卑しむ」ことは芳子へのイメージの両極で、それを判断する基準は「肉の恋」の有無ということである。事実が解明された後の夜、時雄の煩悶は「非常であつた」。それは弟子に欺かれるためではなく、処女ではなくなった芳子を手に入れる様々な想像に追われるためである。「此の暗い想像に抵抗する力が他の一方から出て、盛んにそれと争つた」という時雄の心理が、かれの抑圧の認識を改めて読者に暴露させたのである。

要するに、「蒲団」には一人称独白体と中途半端な三人称の語りが使用されるため、読者は芳子の肉体関係に関する時雄の疑惑心が時雄の妄想にすぎないと思い込んでいた。しかし、テクストの結末になると、時雄の疑惑心が実は事実だということになり、それは芳子の裏切りを意味する。芳子の裏切りによって、「肉の恋」をタブー視する時雄が持つ抑圧する認識の失効が顕在化されたのである。

おわりに

「蒲団」発表後、花袋は「一人称に客観的描写を加へ、三人称小説に主観的描写を加へて、打つて一丸と為したやうな文体が出来るかも知れぬ」（「新式作文法」『文章世界』明治四十年十月）[23]という発言をし、この時期新しい文体を試みる意欲を示した。三人称で語られる「蒲団」の中に、一人称の描写の手法が持ち込まれることはその実践である。一人称の要素を含む語りは時雄の心理の機微に触れることができ、その後の「私小説」という小説ジャンルの出現につながる。一方、三人称の語りは時雄の動作、表情を観察し、時雄を客観化しようとする。

時雄の心理を貫く、読者だけに見せられるのは女弟子芳子への抑圧される欲望である。この男の欲望は、テクストの第四章から第八章まで展開する肉体関係言説によって、より一層明らかにされるのである。当初読者には時雄の妄想だと思われていた芳子の肉体関係に関する時雄の疑惑心が、実は事実であったというテクストの設定には作者の細緻な計算が見られ、芳子の裏切りで、時雄が持つ抑圧する認識の失効を顕在化させようとする意図も窺える。

注（1）小栗風葉／正宗白鳥／徳田(近松)秋江／片上天弦／水野葉舟／松原至文／中村星湖／相馬御風／星月夜(島村抱月)「『蒲団』合評」（『早稲田文学』明治四十年十月一日）、太田正雄(木下杢太郎)／平出修／天野逸人／与謝野寛（鉄幹）「田山花袋氏の『蒲団』」（『明星』明治四十年十月一日）。その中で、プラスの面に向けて、「その主要なる目的を成就せんがためには、創作の上に従来重んじてゐた結構の如何、文章の如何は必ずしも多く問ふを要せぬ」（徳田秋江）が見られる。マイナスの面にむけて、「要するに此小説はあらゆる事件を犠牲にしてまでも、主人公の煩悶を抽象的に描写したと云ふのが、吾人が不満に思ふ點であつて」（平出修）が代表的である。

（2）中村光夫『風俗小説論』（河出書房、昭和二十五年六月）、岩永胖『田山花袋研究』（白陽社、昭和三十一年四月）、平野謙「芸術と実生活」（昭和三十一年四月、『平野謙全集第二巻』（新潮社、昭和五十年二月）所収）

（3）棚田輝嘉「田山花袋「蒲団」――語り手の位置・覚え書」（『国語国文』五十六巻第五号、昭和六十二年五月）

（4）藤森清「語ることと読むことの間――田山花袋「蒲団」の物語言説」（『国文学解釈と鑑賞』平成六年四月）

（5）星月夜(島村抱月)「『蒲団』合評」（『早稲田文学』明治四十年十月一日）

（6）川上美那子「自然主義文学の表現構造――田山花袋「重右衛門の最後」から「生」へ」（『人文学報』二〇七、平成元年三月）

（7）鈴木登美『語られた自己』（岩波書店、大内和子　雲和子訳、平成十二年一月）

（8）鈴木登美氏は、自由間接話法を「三人称過去時制の語りを用いながら、その語りの中に、報告された人物の発話を、「と彼は考えた」のような導入の標識を置かずに組み込む話法」と規定する。

（9）根岸泰子「田山花袋「平面描写」再論――「印象描写」へ至る語り手の問題」（岐阜大学『国語国文学』第十八号、昭和六十二年三月）

（10）『定本　花袋全集』第十五巻（臨川書店、平成六年六月）所収

（11）注（9）に同じ

（12）注（7）に同じ

（13）吉田志穂「物語としての地図――田山花袋『蒲団』論」（『成城国文学』十六号、平成十二年三月）

（14）渡邊正彦「田山花袋の「蒲団」と戦争観」（『日本文学』平成元年八月）

（15）岸規子『「わすれ水」論――恋愛幻想の行方」（『田山花袋作品研究』、双文社、平成十五年十月）

（16）生方智子「プロットと〈欲望〉のパラダイム――田山花袋『蒲団』

における事件をめぐる語り」（『日本近代文学』第六十四集、平成十三年五月）

（17）柄谷行人『日本近代文学の起源』（講談社、昭和五十五年八月）

（18）注（3）に同じ

（19）注（4）に同じ

（20）その前に、時雄が芳子を連れ戻すために、義姉の家へ行った時、芳子の心理描写がある。しかし、「その胸には一種の圧迫を感じたに違いない」、「今の場合でなければ、かえって大に喜んだのであろうに・・・・」に見られるように、直接の心理描写ではなく、語り手による推測である。

（21）滝藤満義「「蒲団」の方法」（『千葉大学人文研究』三十号、平成十三年三月）

（22）注（16）に同じ

（23）『文学研究パンフレット　花袋とその周辺』第十九号（平成五年十二月）所収

〔付記〕テクストは『定本　花袋全集』第一巻（臨川書店、平成六年）を使用した。旧字は新字に改めた。

（おう　ばい、大連外国語学院日本語学院）